

## 27 宝徳四年五月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第四冊

照射欲明

兼良

189 いたつらにまつをあくるやつらからん<sup>(む)</sup> ともしのまつをし<sup>(む)</sup>かこふる夜<sup>(む)</sup>  
の<sup>(む)</sup>

忍契恋

兼良

190 山ふきの花色ころもいはすとも むすひやをかむ井手の下帯<sup>(む)</sup>

待空恋

191 今こむといひしを夢の契りにて まつねの床に有明の月

△注▽190と続けて書写されてゐる。

## 28 宝徳四年六月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』

春曙雲

兼良

192 花かゆめかえそしら雲の山のはに 面かけさらぬあけほのゝ空

月似鏡

兼良

193 くもりなき月の光もまさか木にかゝみやかくる天のかく山

偽恋

兼良

194 心さへうつろふ色のあき仇にうれしかるへきことの葉もなし

29 宝徳四年七月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』

松虫

兼良

195 秋風にすそのゝ尾花うちなひき 浪こす末の松虫の声

牆葛

兼良

196 山さとにくすはひかくる松かきの ひまもあらはにあきかせのふく

後詠恋

兼良

197 しられしなみちのあき露<sup>(お)</sup>をきとまる とこは草葉<sup>(ほ)</sup>になをまさるとも

30 享徳元年（一四五二）八月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』

## 春海辺

兼良

198 あさなけにみまくのほしき玉つしま たまさかにたにかすむあけほの

## 閑庭虫

兼良

199 たれかいも露もはらはんよもきふの もとの心に松虫そなく

## 寄成恋

兼良

200 いかにせむ人まつやとのたそかれを をのか時とていぬそとかむる

## 31 雅世哀傷歌へ宝徳四年二月一日以後

出典 亜槐集

底本 私家集大成・雅親Ⅲ

御成恩寺殿兼良、于時  
閑良、左大臣より、亡父の事なけきおもひたまふことなと消

息ありて

201 和歌の浦に としへてすみし あしたつの をのかつはさに 霜ふり

て 千世もとたれも おもへとも なさけもしらぬ 秋霧の はたへ  
をおかし 身をしほる 嵐の風に たれこめて つもる月日も しら

雪の 猶はれやらて しかすかに 年もかへられは<sup>マて</sup> あらたまる こ  
 とをかことに たのみつゝ なを<sup>ほ</sup>さりとともと 思ひしに こは夢かと  
 よ きさらきの 二日の空の あけくれの かすみとともに きえに  
 けり 此世中の つねなさを いへはさらなり しかはあれと 昨日  
 けふとは あたし野の 露おもひたに よらさりき ましてなけきの  
 このもとは さこそ言のは なかりけめ かゝるかなしき おりに<sup>を</sup>あ  
 ひて 世を驚と なきわふる 涙も雨も しく／＼と ふりにしこと  
 を さらにいま 思ひいつれは てるひかり ちかきまもりの 身な  
 からに みはしの桜 たひならし おとろのみちを ふみわけて く  
 らゐの山の ふたたひを きはめしまては<sup>を</sup>のつから 三代の君に  
 そ あひにける わか身はなれぬ 玉てはこ 二のみちを たつぬれ  
 は なとしら川と いひを<sup>を</sup>きし 春のとまりの 花のかけ 山もとか  
 けて みなせ川 かすみのほらと なしつほの むかしの跡を かへ  
 すして いつゝの人に かそへしや 家のはしめと 成にけむ なか  
 れたえせぬ かは竹の よゝにその名は きこゆれと あゐより出て  
 青柳の いとゝかしこき みことのり くだりし日より こゝのへの  
 大みやにのみ つかへつゝ きよきなきさの ひろふてふ 玉のかす

く あつめても いにしへ今の ことのはに あらたまにつくと  
 なけきしは 万代までも わか君の みそなはせとぞ 思ける つる<sup>(む)</sup>  
 になとけて しりそくは あめのみちとか いふなれば つま木こる  
 へき いとなみに こけの袖とは やつれしを 思つくはの かけひ  
 るき うへ木<sup>(き)</sup>のかせに なつさひて けにすゝしさは あすか井の  
 やとりもさらに わすれぬや 又春秋は 花の本 月のよすかに ま  
 とゐして 玉のむしろを しきしまの みちのさかりに あひにあふ  
 かゝる時代に あつめゆ<sup>(マ)</sup>の めくみもことに ふかければ ねてもさ  
 めても 世をいのり くにゝむ<sup>(む)</sup>くひん 事をのみ 思ひしほとに う  
 つせみの むなしくなれと 苔のした くちせぬ玉は いまも猶 草  
 をむすはんと おもふらん<sup>(む)</sup> おもへはかなし 人の世の むそちあま  
 りの みつせ川 かへらぬ水の あはれけに いつのあふせを たの  
 むらん<sup>(む)</sup> きけはいにしへ ありきてふ ことのをたちし 人なみに  
 たちやかへると 我袖の 涙の露の 玉よはひ よてん声<sup>(マ)</sup>は いたつ  
 らに松風のみや そらにこたへん<sup>(む)</sup>

202

衣更着の鶴の林のけふりにも 君かなけきやたちまさるらん<sup>(む)</sup>

203

和歌浦にとらさる玉もかひなきは さきたつなみのかへりこぬ也

32 雅世一回忌品経歌へ享徳二年（二四五三）二月二日勸進▽

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『品経和歌』

詠方便品和歌

兼良

204 時ありて一たひにはふ花のかも 枝葉ににたる人はしらしな

くく（懐旧）

205 をしなへて昨日の夢とみるうちも 昔やとをき去年のまちかき  
（お） （ほ）

33 享徳三年（二四五四）六月十七日禁裏月次歌会

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『禁中御会和歌』△501・336▽

一尺三寸一分

夏日詠竹不改色 和歌

准三宮兼良

206 君かためうへてもしるく河たけの 千いろに千代の色そこもれる  
（あ）

34 内裏歌合へ康正元年（二四五五）十二月二十七日▽出詠歌

〔底本〕群書類従本

〔校合本〕神宮文庫蔵本△3・999▽

熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵『歌合類聚』△107・36・

5▽所収本

宮内庁書陵部蔵A本△510・46▽

同B本△510・38▽

同『歌合三種』△501・74▽所収本

(神)

(北)

(書A)

(書B)

(書C)

一番 庭殘菊

左勝

女房

○勝―×(北書A書B書C)

逢にあひてうつろふ菊や見し秋の 色にも増る紫の庭

右

准后

○らむ―らし(北書A書B書C)

207 冬きてもまたうつろはぬ庭の菊 もとの雲ゐの秋を恋ふらむ

○きこえ―聞て(神)

左歌あひにあひてうつろふ菊の色あきにも増る心おかしきこえ侍  
(を)

り右の歌時にあたりておもふ心あるにやしかれとも左には及かたし  
仍以レ左為レ勝

十三番 (水鳥)

左持

入道前内大臣

○持―×(北書A書B書C) ○入  
道前内大臣―入道前内大臣公(書  
A書B書C)

あし鴨のさはく入江のうす氷 とけてねぬ夜のごゑの寒けさ

右

准后

〇幾とせか―いくとせそ (北書A  
書B書C)  
〇勝―X (北書A書B書C)

右勝

准后

左

雅康朝臣

三十二番 (忍久恋)

幾とせか古川のへにたつ杉の 上は難面歎のみして  
 侍れと優にしも侍らす右高砂の松にすむつるの雪おれにふるすをた  
 とる心おかしく見ゆかへすかへす右の勝にて侍るへし

〇よめるとは―よめると (書B)

209

しら鶴のかへるふるすやたとるらむ 雪折かはる高砂の松

〇勝―X (北書A書B書C)

右勝

准后

埋めとも猶松の葉のしるきかな 降雪さへに散うせすして

左

左衛門督雅親

二十九番 (松雪深)

〇なぞらへて―なすらへて (書B  
書C)

歌のさま優美にあらずなぞらへて持とや申へからん

〇中―書(神)

風情集の中なにも見をよふ心ちし侍るはいかか右の鷺聖代にかか  
 ることの侍しやらんをしにとりよせられたる心はめつらしく侍れと

〇入江―いりえに(北)

驚すらもとれはとられし我君の 玉の御池になるるをし鳥  
 左あしかものさはく入江ふるきことはにてよろしくきこゆるにこの

208



○はちす葉―はちす(書B)  
 ○事を―事を事を(北)

○持―×(北書A書B書C)

○准后―×(書A)

210 わかおもひ神さふるまでつつみこし 玉のをくしも涙成けり

左うへは難面といへることはしら露のうへはつれなくをき<sup>お</sup>るつと  
 よめるも萩の下葉の色にかけはちす葉の上は難面なと侍るもうらな  
 る事をいへるにや此杉の下葉いかならん共<sup>む</sup>おほえすさためてその證  
 なと侍らむかし右わかなの巻に秋好中宮よりさしなからむかしをい  
 まにつたふれはとありしやらむ絵合の巻よりはひさしく成にけるこ  
 とにや左は不審残れり以<sup>レ</sup>右為<sup>レ</sup>勝

四十五番 (祝言)

左持

関白

代<sup>(を)</sup>をおさめ身をあはせてや君と臣 道の道たる契とはなる

右

准后

211 うこきなき大和嶋ねの外までも な<sup>(ほ)</sup>を静なる四方の浪風

左右同科に侍るへし

35 康正元年十二月二十九日野政光十三回忌品経歌

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『品経和歌』

詠方便品和歌

准三宮兼良

212 海河のまさこのかすの人なりと しらしなふかきそのこゝろは

くく(懷旧)

213 うつもれぬ名をは昔にのこしをきて <sup>(お)</sup>あとゝふ野へにふれる白雪

36 長祿二年(一四五八)八月十九日幕府歌会

【底本】尊経閣文庫蔵『將軍家歌会和歌』△145・古▽

秋日詠松契遯年

和歌

准三宮兼良

214 さらに又松に干とせを契るかな 月と花とのやともかはらて

37 長祿二年秋道興詠百首和歌卷末贈答歌

【底本】尊経閣文庫蔵『続撰吟抄』△86・古▽第八冊

道興

<sup>短冊云々</sup>露かけてはやそめいたせ百草の 花よりあらめ色をたにみん <sup>(お)</sup>

## 返歌

兼良

215 百草のいつれともなき花の色を わきては露のいかゝそむへき

38 寛正三年（一四六二）七月十八日禁裏月次歌会

〔蔵本〕宮内庁書陵部蔵『類聚和歌』

## 初秋

兼良

216 梧のはのそよくもしるき木の間より 秋ほのめかす若月のかけ

## 朝恋

兼良

217 朝ねかみけつれはおつる筋ことに あかてわかれし人をしそ思ふ

39 寛正五年（一四六四）十二月五日仙洞三席詩歌

〔蔵本〕宮内庁書陵部蔵『御会部類記』Λ210・741V

冬日同賦八紘帰聖献応

製以明為  
韻

従一位臣藤原朝臣

兼良上

△注▽「八寅」が正しい。

重華宮裏燕群英

賡載時聞賦鹿鳴

無限恩波八寅外

漁歌樵唱又文明

冬日同詠松為久友應製和歌

從一位臣藤原朝臣

兼良上

218

今そしる君ちよまてのことふきは　みなみの山のみねの松かせ

40 文明二年（一四七〇）正月六日北畠家連歌合跋

〔國本〕宮内庁書陵部藏本△502・419▽

玉しきたひらのみやこは

戦場となりむくらふのけか

しきやとは兵火にかゝりし

ころおひからくにゝはゆかねとも

虎のくちをのかれんとおもひ

わたつうみをはわたらねとも鯨

のあきとにかゝらん事をそれて

からうして桃の花の名に

おふ坊をうかれいてゝたとるく

ならの葉のふりぬる里におち

とまりぬ故郷のかたをかへり

みれは千里のうみ山をへたて

たることくにして旅館のや

とりをかりては三とせのはる

秋を(お)くれり長安の花香

炉の雪に簾をまきて瞻望

をこらし在明の月野寺の

鐘に枕をそはたてゝ無常を観

するほとにてなす事もなくして

あかしくらし侍るほどに柴のあみ

戸をたゝくを(お)とのし侍れは水

鶏のなくへきころにしあらされは

啄木のつゝくにやと思侍りけ

れはさはなくして神風や伊せの

使のふりはへきたるにそあり

ける一封の玉つさに両帖の

草子をそへられたりこれをひらき

みれは五百句の連歌をつかひ

て二百余の判詞をもとめしむ

つたなき翁はからさるに漂泊

の身となりては一巻の書をも

たつさへす愚昧の質のうへに

七旬の毫をさへこへぬれは

みし事きゝし事はみな生を

隔たるかことくになりてひかおほえ

ひかみゝにて夢にみちゆく心地

し侍れはまして物合におき

ては難波江のよしあしをさため

飾磨市のかちまけを論せん

事は身外におもひなしたる

心中に侍れとかつは余習に

ひかれかつは懇望のさりかたき

によりていな舟のいなとはいひ  
かたくしていさゝ原のいさゝかに

その心さしをのへ侍るもの也

ふみあきらかなるといふ二とせ

のはるむ月の上の六日七旬に

一とせたらぬおきなかしわさに

なんありけるかへるかりの事

つてをまつあひたうら嶋かはこ

におさめをく<sup>(お)</sup>なるへし

219 伊勢人のみるめもさらにはつかしの もりのことの葉かきそあつむる

# 41 文明三年（一四七二）閏八月十五日十五夜詠歌

【出典】『大乗院寺社雜事記』

成就院ニ参申、大閏壬八月<sup>十五夜</sup>御詠歌、

220 かそふれは日数は秋の残にて 葉月の月の名をそかさぬる

42 後花園院一回忌哀傷歌ハ文明三年十二月三日V

〔出典〕『大乘院寺社雜事記』

故院一廻来廿七日也、為御仏事五部大乘經被書写之、花嚴經第四卷大閤被染御筆畢、同被進御詠歌、有序、一年不言事歟

221 春をまつ霞の谷の鶯も ことしはかりそ音をもしのはん<sup>(底)</sup>

43 藤河の記ハ文明五年五月以降V

〔底本〕靜嘉堂文庫藏本ハ82・63V

〔校合本〕宮内庁書陵部藏伏見宮本ハ伏・57V

中川祐徳文庫藏『桑孤』所收本ハ6・1}2・784・別6V

群書類従本

扶桑拾葉集本

神宮文庫藏本ハ8・856V

天理図書館藏本ハ291・3・743V

岐阜県立図書館藏本ハ3・65・4V

東京大学総合図書館藏本ハE26・478V

宮内庁書陵部藏黒川本ハ黒・125V

内閣文庫藏本ハ177・1104V

島原公民館松平文庫藏本ハ116・42V

宮内庁書陵部藏御所本ハ501・787V

(底) (伏) (祐) (群) (扶) (神) (天) (岐) (東) (黒) (内) (松) (御)



- 尊經閣文庫蔵本<sup>八</sup>9・41<sup>V</sup> (尊)  
 筑波大学附属図書館蔵本<sup>八</sup>ル・170・85<sup>V</sup> (筑)  
 九州大学附属図書館蔵本<sup>八</sup>549・ミ・13<sup>V</sup> (九)  
 都立中央図書館加賀文庫蔵本<sup>八</sup>2497<sup>V</sup> (加)  
 東京都立大学附属図書館蔵本<sup>八</sup>911・4・I13i<sup>V</sup> (都)  
 寛文12年刊本 (寛)

## 〔序〕

胡蝶の夢の中に百年の楽を貪り蝸牛の角の上に二国の諍を論すよしといひあしといひたゝかりそめの事そかしとにつけかくにつけてひとつ心をなやますこそおろかなれ応仁のはしめ世の乱しより此かた花の都の故郷をはあらぬ空の月日のゆきめくる思ひをなしならのはの名におふやとりにしても六かへりの春秋をおくりむかへつゝうきふししけきくれ竹のはしになりぬる事をうれへこひちにおふるあやめ草のねをのみそふる比にもなりぬれば山の東みのゝくにゝむさしのゝくさのゆかりをかこつへきゆへあるのみならず高砂の松のしる人なきにしもあらされはさみたれかみのかきくらぬさきにとみのしろ衣思たつ事ありけりこの月はよろつにいむなるものといふ人ありけれと人の事はしらす我事にとりてはこの七日にむまれたれはかへりてよき月と思はへるものをとありしかはき

く人ことはりとや思ひけん<sup>(む)</sup>

【校異】 一に——には(筑) 二食り——むさほる(尊筑九加寛) むさほる(都) 三の——を<sup>の</sup>  
 (都) 四論す——論た<sup>す</sup> 五そかし——そかしに(御) 六とにつけかくに——とさつけう  
 たに(尊) ものにつけうさに(筑) にとさつけうたに(九) 物につけうたに(加都寛)  
 七ひとつ——ひとり<sup>イニツ</sup>(都) へはしめ世の——治世の(松) 八都の——都の(松) 九をは——  
 を(伏) をは<sup>イ</sup>(東) 二空の——空<sup>のイ</sup>(東) 三めくる——めくり<sup>るイ</sup>(東) 四を——も  
 (岐) 一なら——なち<sup>ち</sup>(黒) 二五に——×(内) 一六おふ——あふ(天岐東) 一七かへ  
 り——回り(尊筑九加) 廻り(都) 回り(寛) 一八を——×(内松) 一九むかへつゝ  
 ——むかへて(加都寛) 二事——身(祐群扶神天岐東黒内松尊筑九加都寛) 二を——  
 の(天岐) 三こひち——道(黒) 三の——×(天岐内松) 四そふる——うふる(尊  
 九都寛) こふる(加) 五比——身(黒) 六に——にしも(尊筑) 七くに——  
 くに(黒) 八むさし——草(黒) 九を——×(黒) 一〇なき——あらさる(筑) 一  
 さみたれかみ——さみたれのかみ(天岐) 二くもらぬ——くもりぬ(尊) 三にと——  
 よと(松) に(都) 四みのしろ衣——×(尊筑九加都寛) 五けり——ける(黒) 六  
 よろつに——よろつ(神) 七人——人も(都) 八ありけれと——ありければ(神)  
 ありけれと(東) 九しらす——我ならす(黒) 一〇事——身(筑九加都寛) 一この  
 二の(松) 三月——日(加都寛) 三ありしかは——ありしに(神) 四きく人  
 ——きく人(神)

## 〔五月二日〕

さるほとに二日のあけかたにならの京を立て般若寺坂をこえ梅谷なといひて人はなれこゝろすき所くをへてかものわたりを過三日の原といふ所に興をとめて思ひつゝけ侍る

222 かすふれはあすは五月のみかの原 けふまつならの都出つゝ  
泉河を舟にてわたりて

223 わたし舟楫さすみちに泉川 今日より旅の衣かせ山

これよりして新関共を世のみたれに事よせておもふさまにたてをきつゝ旅行のさはりと成にけり仁木なといへる領主のかたくをこしらへて事ゆへなくはとをり侍れと心くるしき事のみありけり

224 さもこそはうき世の旅にさすらへめ 道さまたけの関なとかめそ

伊賀の国あさ宮といふ所にいたりぬれは日もやうくくれかたになり雨そほふりて前路もとけかたく行かゝりてやとりもなくは中々あしかりぬへしと人々申侍れはそのあたりに小家のあるをかりて一夜をあかし侍りぬ

225 行暮て雨はふりきぬ朝宮を あさたつまでの宿やからまし

校異 一立て——立出て (黒) 二梅谷——梅た、(尊筑九加寛) 三いはて人はなれ——  
 いふ所を出はなれ (黒) 四所く——ところ (内松) 五過——すぎ (東松九寛) 六所に  
 所イ (東) に (内松) 七興——轡 (岐) 八侍る——侍り (伏祐群扶神天岐東黒内松  
 御尊九) ける (筑) 九かすふれは——かそふそは (伏祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九  
 加都寛) 一〇あす——あそ (都) 二棹——さ月 (都) 三みち——うち (加) 四旅  
 の衣かせ山——× (伏) 旅に衣かせ山 (都) 五たてをきつ——たて置つる (加) だ  
 ておきて (都) 六と——に (尊筑九都寛) 七けり——ける (神岐) 八なと——ないと  
 (東) と (黒) なと、(加) 九事ゆへなくは——事ゆへなくそ (伏) 事ゆへなく (天岐  
 黒尊筑九加都寛) 一〇さすらへめ——さすらはめ (祐群扶黒) さすらへて (神) さすら  
 へは (東) さすらへて (都) 一〇関な——おきな (内) 三とかめそ——とくめそ (祐群  
 扶神天岐東黒内松御尊筑九都寛) 二とめそ (加) 三前路——落路 (都寛) 三とけ  
 かつく——とめかつく (筑九加都寛) 四中々——中々に (内松) 五あしかりぬへし  
 ——あしかりぬへし (東) 六申侍れば——申侍りければ (黒) 云侍れば (加都) 七  
 あたりに——あたり (九寛) 八のある——× (黒) 九かりて——よりて (筑) 一〇  
 を——× (尊筑九都寛)

## 〔五月三日〕

三日あさみやをたちて野しりとひかはくらほねなときもならはぬ木こ  
 り草かりならてはかよはぬ所を過てみちのゆくに石山寺にまうて、大  
 悲者を礼し奉る

226 さはきたつ世にもうこかぬ石山は 実あひかたき誓なりけり

浜の関とかやは青蓮院の座主に申してとをり侍りぬ松本をすき大津にいたりて過こしかたをかへりみて俳諧の躰を思ひつゝけ侍り  
 227 くらほねははやく過てき荷かけ駄を おほつの里にしはしやすまん  
 かくてそのよは坂本の宿にとまりぬ七の社はそなたとはかりおかみ奉りて

228 老か身もこえむ干とせの坂本に 杖とそ頼む七のかみかき

〔校異〕一とひかは——今富川ならん戸井川(黒)ニきゝもならはぬ——きゝもならはす(神天岐東内松御尊)きゝならはす(九)ニゆくに——ゆくてに(祐群扶神天岐東黒御尊筑九加都寛)行ても(内松)やくてに(加)四石山寺——石山(内松)五大悲者——大悲前(東)大悲(黒)大悲士(松)六礼し——祈り(黒)拝し(筑)七さはきたつ——さはき川(都)八あひかたき——ありかたき(岐)九けり——ける(尊九)一〇の——×(尊筑九加都寛)二侍りぬ——侍り(神天岐東黒内松御尊九)三松本——坂本(神)春本(加)四侍り——侍りて此朱文真本ニ如是来ニ至此例也(天岐)侍る(黒)けり(内松)侍りぬ(都)五荷かけ駄を——荷かけ馬(神)をちかけを(加寛)六に——と(神黒)に(東)七坂本——坂下(東)八とまりぬ——とまりぬ(御)九そなたと——そなたと(黒)一〇も——の(筑加都寛)二〇こえむ——こらん(扶)三こそ——こそ(尊九)

〔五月四日〕

四日坂本を出て舟にのるとて

229 さゝ波やけふを日吉の船出せん <sup>(む)</sup> <sup>(お)</sup> <sup>(お)</sup> をひ風をくれ唐崎の松

されとも順風なければひねもす鱸をおして行堅田の浦に船をよせて

230 こしかたはかたゝの浦にほすあみの 目にかゝりつる山の端もなし

山あひを過る時あらしはけしければかた帆に風をうけてはらしむ時の

ほとに三四里はかり過ぬといふをきゝて

231 舟人の心つかひは見えてけり まほもかたほも風に任て

よるの四つの時にはつさかといふ里に舟をよせてしはらく休息すこれよ

り夜に舟をいたして

【校異】一のとて——のるとて 朱鳥學集本ニナシ末ニ至リ此例也 (天岐) のりて (尊筑九加都

寛) 二船出せん——舟出む (黒) 三をくれ——ふきをくれ (東) おくる (尊筑)

四ひねもす——<sup>数刻歌</sup> <sup>日数もすき</sup> (黒) 五行——ゆく程に (天岐) × (加) ゆき (寛) 六かゝ

りつる——かゝりつく (黒) 七はけしければ——初時雨しければ (内松) 八に——×

(御) 九はしらしむ——はしらしむ (東) はしらん (内松) 一〇時のほとに——× (黒)

二いふを——× (黒) 三は——そ (都) 三四つの時——四つ時 (伏祐群扶神天岐東

黒内松御尊筑九加都寛) 四はつさか——はつたり (神) 五に——も (内松) 六し

はらく——× (内松) 七これ——<sup>そイ</sup> <sup>これ</sup> (群東) <sup>それ</sup> (神天岐黒内松御尊筑九加都寛)

## 〔五月五日〕

五日のほの／＼にあさ妻につきぬ

232 ほの／＼とあさつまにこそつきにけり ー また夜をこめて舟出せしみち  
 232 さめかいといふ所清水いはねよりなかる一すちは上より一すちは下より  
 なかれて末にひとつになかれあふまことやらんみの養老の滝につゝき  
 たりといへりしはらくこゝにすゝみて

233 夏の日もむすへはうすき氷にて あつさややかてさめか井の水

234 岩かねを別て出るさめかいの なかれやつゐにあふみちのすへ

かしは原にて

235 吹風やまたこぬ秋を柏原 葉ひろかしたの名にはかくれず

たけくらへといふはあふみとみのとの山を左右にみてゆく所也

236 右ひたりみて過行はあふみ美濃 二の山そたけくらへする

伊増塔下といふはみのゝさかひにて賢城とみえたり一夫関にあたれば万

夫すきかたき所といふへし

237 此山に神やいますと手向せん もみちのぬさはとりあへすとも

鶯の滝といふ所を

238 夏来ては鳴音をきかぬ時鳥 たきのみなはや流あふらん

藤川のはし（き）のけたの落たるを見て

239 たつねはやいくとしなみをわたれはか なかはたえぬる藤河のはし（き）

240 思へ君おなしなかれをたえすして 万代ちきるせきの藤川

くろちのはしといふ所を

241 白波はきしの岩ねにかゝれとも くろちのはしの名こそかはらね

野上（き）の茶屋にこしをたてゝ

242 旅人（き）にめさまし草をすゝめすは 野上の里にひるねをやせん（む）

昔清見原の天皇東宮の位を辞し出家して吉野山にいられしかとも猶ゆる

しなくて大友の皇子（き）にをそはれたまひし時ひそかに山をのかれ出て伊賀

伊勢（き）の国をへてみのゝ野上（き）に行宮をたてられし事は日本記（マ）なとしるし

侍れと事（き）とをき事なれば宮の旧跡なとたしかにしる人は有かたかるへし

今はくさかりはらはのあさゆふふみかよふ道（き）となりたるを見侍りて

243 あけまきは野上の草（き）をかり宮の 跡ともいはす分つゝそゆく

山中（き）といふ所を過て

244 時鳥おのかさ月を山中（き）に おほつかなくも音を忍ふ哉

不破の関屋をみ侍るになにとなくむかしおほえてものあはれなり中御門

摂政（き）のあれにし後はたゝ秋の風（き）とよみたまいし事なと思ひあはせられて



245 あれはつるふはの関やの板ひさし 久しくも名をとくめける哉

関屋の中にちいさきほこらのあるをさと人に尋侍れはこれなむきよみは  
 らをいわるたるといふまことやかかの御代にいくさをふせかんとてたてら  
 れし事なれといまは関のやうにもあらぬをみ侍りて

246 清見原とをきまほりの名をとめは 関のかためはさもあらはあれ

五日のさるの時はかりにたる井のしゆくにつくけふは南宮の祭とて見物  
 のともからものさはかしくたちさまよひけり風流の山かさなとありとか  
 やむかしのことくならはこの所に遊女なとあるへきにや杜牧か珠簾十楊  
 州路といへる事をおもひなすらへて

247 あさはかにこゝろなかけそたま簾 たる井の水に袖もぬれけん

又軒にあやめをふきわたす事都にもかはらさりければ

248 我宿の妻にはあらぬあやめ草 今夜かりねにかたしき床

〔校異〕一けり——けれ（伏祐群扶神天岐東内松御尊九加都寛 二さめかい——醒井（黒）

三所——所に（加都寛） 四清水——清水の（加） 五より——よりなけれ（東） 六一すち

は下より——×（筑） 七に——にて（祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛） 八あふ

——あふ（祐） あふ（扶） 九まこと——城（愚） まことに（筑） 一〇やらん——や（愚）

ならん（都） 二みのの——みの（加） 三つゝきたり——つぎたり（寛） 三も——に

(加)に(都)<sup>イニモ</sup> 一四むすへは——むかへは(加) 一五やかて——まさる(加) 一六別て  
 ——はかれて(天)はかれて(岐) 一七を——も(天岐) 一八かした——かゑた(黒)  
 か下(松) 一九過——行(天岐) 二〇あふみ美濃——あふみちの(祐群扶御) 二一そ——  
 に(松都)も(加) 二二伊増——伊吹(黒) 二三いふは——いふ所は(天岐) 二四所(内  
 松) 二五一夫——先(筑) 二六万夫——万夫も(加) 二七と——の(神天岐東黒内松御尊  
 筑九加都寛) 二八×——とほりて(天岐内松) 二九時鳥——鶯の(祐群扶神天岐東黒内  
 松御尊筑九加都寛) 三〇みなはや——水泡や(神) みはやく(都) 三一のけたの——の  
 けたのイはたの(東)のけた(内松都)のはたの(御)はたの(加) 三二わたればか——  
 渡ればや(神) 三三たえぬる——たえぬ(加) 三四を——の(伏祐群扶神天岐東黒内松  
 御尊筑九加都寛) 三五かゝれとも——かくれとも(黒) 三六野上の茶屋・・分つゝそ  
 ゆく——(二四)ノ後ニアリ(天岐) 三七×——又されうたを(祐群扶神天岐東御尊筑九加  
 都寛)されこと(黒)又され哥(内松) 三八に——の(黒) 三九辞し——辞し(東) 辞し  
 たまひ(都) 四〇出家——家出(神東内松御)なを(天岐) 四一して——有て(黒)に  
 て(内松) 四二いられしかとも——入給しかとも(内松御尊筑九加都寛) 四三なくて  
 ——なくして(神天岐東黒内松九都寛) 四四出て——出(黒) 四五の国を——×(内松  
 皇へて——過て(神) 四六野上——野上(東) 四七事は——×尊筑九寛)と(加都)  
 哭なと——なとイ(東) ×(内松御尊筑九加都寛) 四八と——とも(加都寛) 四九事——  
 ×(加) 五〇の——のイ(東) ×(黒) 五一たしかにしる人——たしかしるへ(黒)たし  
 かしる人(東) 五二有かたかるへし——かたかるへし(天岐加)有かたし(内松) 五三  
 はらは——わらは(祐群扶神天岐東黒内御尊筑九加都寛) 五四と——に(筑九都寛)  
 哭なりになる——なりたる(神天岐黒内松御尊筑九加都寛) 五五見侍りて——見て(都)  
 哭を——の(内松) 五六山中——山中<sup>中山</sup>(神) 五七過て——過るとて(神) 五八を——の  
 (群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛) 五九山中——中山(神) 六〇ものあはれなり——

ものあはれなりし(黒) 齒の——×(黒尊筑加都寛) 齒よみたまいし——よみ給ひ  
 しイ(東) よみ侍し(御) 齒も名を——も 名を(祐扶) 名をも(尊筑九加都寛)  
 空とゝめける——とゝめける(祐) とゝめける(扶) とゝめける(加) とゝめける(都)  
 六侍れは——侍りければ(天岐) 六たる——奉る(祐群扶加都) たてまつれる(神天  
 岐東内松御尊九寛) てまつれる(筑) 七まこと——城(黒) 七いくさ——いくさ(神)  
 三と——とも(黒) 三にも——に(筑) 齒とめは——とめて(天内松加)  
 とめて(東) とめは(都) 齒はかりに——はかりにイ(東) 七けふは——今日(加)  
 七南宮——当宮(神) 七のともからもの——×(黒) 七けり——ける(加都寛)  
 八山かさ——山かさ(祐群扶) 山かさり(神) 山かた(加都寛) 八あり——ある(九  
 寛) 八ことく——まゝ(加) 八へき——中(黒) 八十——十里(祐群扶神天岐東  
 黒内松御尊筑九加都寛) 八を——×(加) 八なすらへて——なすらへ侍りて(祐群  
 扶神天岐東黒内松御) 八こゝろ——おもひ(内松) 八も——は(東) 八ぬれけん  
 ——ぬれなん(祐扶) ぬれなん(群神天岐黒内松御九) そめなん(尊筑加都寛) 八を  
 ——×(加) 八にも——にて(松) に(加都寛) 八かはらさりければ——まさりさ  
 りければ(黒) 八の——に(尊筑) 八に——の(都) 八かたしき床——かたしき  
 の床(伏祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛)

## 〔五月六日〕

六日の早朝たる井をたちぬみちすからの名所ともおほくはわすれ侍りあ  
 をのか原を過侍れは昔ものゝふの有しかうちにしたる所とかやいへり  
 分行は四方の草木の色も猶 あをのか原の夏の一こゑ

あかさかをこゆとて

たゝかひのむかしの庭もには鳥の 赤坂こえて思出つゝ

くるせ川といふ所を舟にてわたりて

渡守ゆきゝにまもるくるせ河 月の兎もよるやまつらん

江口といふは摂津国にある同名也されと遊女などとはなくて夜になれば鶺鴒

飼のくたると云を聞て

うかひ舟よるを契れる是も又 おなし江口のおそひなりけり

七つ打程に鏡嶋の小庵につく院主かたらく此ほどの庵はさはる事ありて

此二日こゝにうつり侍りこゝをは長寧院といふ僧の所をかれるとなん紫

のゆかりともすたく所なればよろつにまつ心やすし

〔校異〕一の——×(黒加) 二早朝 申の刻イ 早朝(天岐) 三の——×(筑) 四おほくは——

おほく(内松尊筑九加都寛) 五侍れば——侍りければ(黒) 六の——×(加都寛)

七コノ歌ナシ(尊筑九加都寛) 八草木——草は(黒) 九こゑ——ころ(祐群扶神天岐東

黒内松御) 一〇あかさかをこゆとて——×(尊筑九加都寛) 二こゆ——こゆる(東)

こゆる(黒) 三たゝかひの——たゝかひし(加) 四庭——場(天岐) 五くぬせ川

——株川(神内御加寛) 株瀬イニ無川(東) 株瀬川(筑) 一五まもる——まほる(黒)

六くぬせ河——くひさ川(尊九) 一七月の兎もよるやまつらん——月の本ノマ、(加)

八も——に(群) 九に——×(黒) 一〇に——×(尊九都寛) 二を——を(祐群扶

と(筑加都寛) 三契れる——契れは(祐群扶天岐東内松御尊筑九加都寛) 三おなし  
 ———<sup>イイハ</sup>おなし(祐群扶) いへは(神天岐黒内松御尊筑九加都寛) 三七つ打程に——<sup>イニ</sup>七ツ打  
 程に(天) 七町打ほと行に(黒) 七つ打ほとは(尊筑九都寛) 三院主——×(都) 三  
 かたらく——かたて(伏) かたく(神内松) 堅奥(天岐) かた／＼(黒) 三二日  
 —二日に(天岐内松御筑九加都寛) 三六侍り——侍りぬ(都) 三九こゝをは——こゝ  
 は(加) 三寧——<sup>寄</sup>寧(祐扶) 亭(天岐) 寿(加) 寄(都寛) 三いふ——云所の(筑)  
 三すたく——すへき(筑) 三所なれは——所なれイは(東) 三よるつに——よろつ  
 三イ(東) 三心やすし——心やすく(黒) 心やすかる(内)

## 〔五月七日〕

七日かはての持是院にかくたりたりよしをつく三位の大僧都妙椿すな  
 はちきたりて思ひよらざるよしをいふさらはあすよりは正法寺休所をか  
 まふへきよしをしめす旅のつかねとねん比に下知をくはふたくし  
 ければもらしつ

校異 一七日——七日ニ(天内松) 二かはて——<sup>イイ</sup>かはて(東) 三かいて(黒) 三是——足  
 (祐扶) 足<sup>イ</sup>(東) 四たる——候(尊筑九都寛) 五つく——云(松) 六大僧都——僧都  
 (内松) 七椿——<sup>イ</sup>椿(天岐) 桂(内松) 八思ひよらざる——思ひよらす(岐) 九よし——  
 のよし(天岐) 一〇あす——都(黒) 二は——×(尊筑九加都寛) 三正法寺——正

法寺に（祐群扶神天岐東黒内御尊筑九加都寛）  
 一三 かまふ——かもふ（都）  
 一四 くはふ  
 ——くはへ（黒）  
 一五 もらしつ——もらし（尊）

## 〔五月八日〕

八日正法寺に<sup>一</sup>うつる此寺は禅刹の諸山也由良門徒<sup>二</sup>にて山号をは霊葉山といへり国中最初の禅林なり傍に新造の一寮あるを休所<sup>三</sup>にかま<sup>四</sup>へてつりすましむ朝夕のまうけなとくた<sup>五</sup>くしければ<sup>六</sup>は<sup>七</sup>しるすに不及<sup>八</sup>さりなから鳳のあふり物麟のほし<sup>九</sup>のなきはかりにや有<sup>一〇</sup>けん<sup>一一</sup>

〔校異〕一に——へ（内松）ニうつる——うつりぬ（筑加都寛）三にて——にして（神天岐内松御尊筑九加都寛）にして（東）して（黒）四傍に——×（神）五ある——のある（東黒御尊寛）六休所——休息所（黒）七つり——うつり（祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛）へまうけなと——×（黒）まうけ（加）八くた<sup>五</sup>くしければ——くたしければ（都）九しるすに不及——しるさす（加）一〇さりなから——<sup>一五</sup>さりなから<sup>二五</sup>（此五字なし）  
 （東）×（神尊筑九加都寛）  
 一三 あふり——あふ<sup>リ</sup>（東）あふり（内）  
 一四 ほし——  
 おらし（扶）ほししら（東）ほしし、（内松九都寛）  
 一四 有けん——×（黒）有らん（松）

## 〔五月九日〕

九日歌の披講あり

〔校異〕一九日歌の披講あり——×（九都寛 九日（加））

〔五月十日〕

十日連歌百句有

〔校異〕十日——×（加） 二句——韻（祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛）

〔五月十一日〕

十一日正法寺のむかひに城をつき池をふかくして軍壘のかまへをなせり  
 すなはち舟をうかへてほりのうちにいたり僧都つねに居る庵有山居のす  
 ま居をまなひ後園なとあり持仏堂は浄土の三昧をもとゝせると見えたり  
 名作の本尊ともおほし此たひ庵号をもとめしかは法城と云二字をかきつ  
 かはし侍り齋藤新四郎利国は僧都の姪ながら猶子にせりその人の館に行  
 てみ侍れはいつくもかきはらひて武具ともとりならへなに事もあらはす  
 なはち打立へき用意也さながら又風月歌舞の道をもすてさると見えたり  
 此所にして酒宴の興をもほす美伊法師といふ土岐美濃守源成頼の息男生  
 年九歳也回雪の袖をひるかへすむまれなからにして天骨を得たりむかし

長保の比東三条女院の御賀の試案に御堂関白の長男<sup>三六</sup>宇治関白也<sup>三九〇</sup>十歳のわらは<sup>三</sup>にて陵王をまひ次男堀川右大臣也九歳にて納蘇利を舞し事思いたされ侍<sup>三</sup>り古の舞と今の舞とは手つかいあしふみなとかわるへけれども少年の人<sup>三</sup>その骨をえて人を感じせしむる事は異曲同工といふへきにや<sup>三</sup>

〔校異〕一城を——城<sup>を歌</sup>（内） 二ほり——城（天岐） 三いたり——いたる（伏祐群扶神  
天岐東黒内松御尊九加都寛） 四有——なり（東黒） 五まなひ——まなひて（加）  
六は——×（黒加） 七の——×（黒） 八もとゝせる——もとゝせる（伏） 九もとゝせる  
（祐群扶）もとゝせる（神天岐東内松御）もとゝせる（黒）もとゝせる（尊筑九）もよ  
ふせり（加）もよほせり（都寛） 九本尊——中尊（天岐） 一〇おほし——おほえ<sup>し歌</sup>（御）  
二を——と（内松） 三法城——方丈（黒） 三侍り——侍る（筑）侍りぬ（都） 四  
み侍れは——見れは（岐内松） 五立——立ぬ（黒） 六さなから——さりながら（群  
神東黒尊）さるから（天岐御筑九加都寛） 七見えたり——みえて侍り（筑） 八にし  
て——にて（内松） 九もはす——もよほす（祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛）  
一〇いふ——いふは（神天岐東黒内松御尊筑九加都寛） 三の——×（黒） 三男——×  
（内松） 三九——八（御） 四四——四（都） 五にして——×（神天岐東黒内松御  
尊九） 六天骨——て骨<sup>其</sup>（松）骨（加都寛） 七得たり——得たる（内松尊九） 八東  
——×（内松） 九也——×（筑） 一〇十歳の……右大臣也——×（天岐） 三にて  
——は（加） 三陵王——陵王（扶）龍王（東内松御尊筑九） 三也——×（筑） 四  
にて——にして（尊筑九加都寛） 五侍り——侍る（筑） 六古——もと（黒） 七と



—を(黒) 天舞—舞の<sup>イニ</sup>(東) 元とは—と(御尊筑九都寛) 四<sup>ニ</sup>なと—な  
 とは(黒) 四<sup>ニ</sup>とも—と(天岐加) 四<sup>ニ</sup>人—人の(黒尊都寛) 四<sup>ニ</sup>をえて—とみ  
 て(内松) 四<sup>ニ</sup>感—感歎(祐扶群神天岐東黒内松御筑九加都寛)

## 〔五月十二日〕

十二日猿楽あり彦松といふ猿楽也一場はてゝ後美伊法師又舞台にして袖  
 をかへす猿楽にははるかにまされるよし人みな感じけり僧都も興に入こ  
 とはり<sup>セヘ</sup>と覺たり

〔校異〕一彦松—彦春<sup>松イ</sup>(伏祐群扶) 孝松(天) 二はてゝ—はてた(東) 三かへす—  
 ひるかへす(天岐内松) 四<sup>ニ</sup>はるかに—はるか(筑) 五けり—ける(神黒) ぬ(加)  
 六入—入けり(神天) 入れり(岐) 入れイり(東) 入り(御) 七と—も(黒) とそ  
 (尊筑九加都寛) 八覺たり—覺侍り(内松) 見へし(加) 覺し(都寛)

## 〔五月十三日〕

十三日正法寺にて短尺の評あり詩の題は龍瓦硯也この硯は東坡か詩集に  
 みえたるにやさる硯のありし故也抑作文の事久しく筆をさし置てあとか  
 たもなく韻声<sup>ム</sup>などをわすれはてぬれと僧都しきりにすゝめ侍れは廿八字  
 をやうく<sup>ニ</sup>かきつらねたるはかりなり又方丈の前に二株の松をうへて三<sup>三</sup>

たひ鋤をくたす事有き追述一偈云

鷲峯正法遍塵々 靈藥毒人還活人

五祖山中誰作主 栽松道者是前身

〔校異〕一評——禪（都） 二瓦——尾（天岐東内松御筑九加寛） 虎（都） 三視——石（神）  
 石イ 硯（東） 四か——×（黒） 五ありし——有（天岐） 六事——書（筑九都寛） 七筆——  
 草（御） 八かた——かたち（神天岐東黒内松御尊筑九加都寛） 九を——も（群神天岐東  
 黒内御尊筑九加寛） 一〇ぬれと——ぬれとも（天岐内松） ぬと（黒） 二を——×（尊筑  
 九加都寛） 三三たひ——三度の（加都寛） 四追述——追休也（尊九加都寛） 退休也  
 （筑） 五還——亦（東） 六中——頭（中イ）（東） 下（尊筑九加都寛）

〔五月十四日〕

十四日かゝみしまへかへるたまく下向の次國中の名所旧跡をも歴覽し  
 たくは侍れと此十一日に細川右京大夫勝元朝臣卒去の聞えあり東軍の棟  
 梁かくのことくなれば此きさみに国さかひまた蜂起する事もやあらんし  
 からは通路思ふやうなるましきうたかいあるによりて後会期遙といへと  
 も前路ほととをかるへければいそき僧都にこのをもむきをしめして帰馬  
 にむちうつものならし

〔校異〕一かゝみしま—かゝしま（神天岐内松御加都）かゝみなし（東）からしま（尊  
 筑九寛）ニたまゝ—たま（黒）三下向の—下向したる（黒）四次—次てに  
 （天岐黒内松）五の—のイ（東）六をも—を（内松）七に—×（神東黒内松御  
 尊筑九加都寛）へ勝元—晴元（都）九東—北（松）二なれは—まかりなれは  
 （東）二きさみ—ささき（筑加都寛）三国さかひ—国さかひは（神）国本（東）  
 小国のさかひは（黒）三また—×（神内御尊筑九加都寛）ささく（東）四しから  
 は—しからはついに（東）五通路—道路（黒）六なるましき—なるまし  
 きと（加）七よりて—より（内松）八遙—遙なり（天岐内）遙なりイ（東）九  
 とをかるへければ—遠ければ（黒）二いそき—×（神天岐黒内松御尊筑九加都寛）  
 いそき（東）三僧都に—僧都法印にいとまをこひてまつなかつを帰馬にむちつ  
 つものならし僧都に（東）三を—×（内松）三しめして—しめしてまつ  
 （東）しめし（加都寛）二うつものならし—うたんとする物也（天岐内松御）うつ  
 ものイならし（東）

# 〔五月十五日〕

十五日ことなる事なし

〔校異〕一十五日ことなる事なし—×（加都寛）

〔五月十六日〕

十六日ほしの内の僧正のあくたみの庄を一見すへきよししめすまで江口  
より舟にのりて二里はかり川つたひにさかのほる因幡山のふもとをすく  
る路あり此山は奥州より金の化来せるよし因幡社の縁起に有とかや  
253 峯に生る松をはしるやいなは山 こかね花咲御代の榮を

254 さなへとるふもとの小田にいそく也 そよくいなはのみねの秋風  
けふは小雨そきて風いさゝかふく日入てかしこにいたるふねの中の窮  
屈にたえずなはち偃臥す前後をしらす天明に及す明日僧正申奉るは昨  
日は涯分奔走いたし谷の底までほりもとめしかひもなくつるにおとろか  
てとありしかは睡眠のきさしゝにやかて枕をかたふけしこゝろよさは郎  
255 鄆遊仙のたのしひもかくこそとおほえし也それにまさるほとのもてなし  
はこゝろにくくもおほえぬとそわらひ侍りき

〔校異〕一ほし——竹（祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛）二の内——田（天岐）  
内イ

三の——×（内松）四あくたみ——あつたみ（東）あみた（黒）五よし——よしを（天  
岐）六しめす——しめすに（黒尊）七まで——よて（伏祐群扶神東黒尊）によつて  
（天岐内松）に落致 八よて（御）によて（筑）によて（九）によりて（加都寛）へさかのほ  
る——さかのほり（神東黒内松）のほり（天岐）九あり——なり（群扶神天岐東黒内

松御尊筑九加都寛 一〇化来——他来(神) 二せる——する(都) 三縁起——縁起  
 (東) 三をは——とは(群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛) 四咲——さて(黒) 五  
 秋風——まつかせ(黒内松) 六は——に(黒) 七そくきて——ふり(加) 八入て  
 ———いりてから(伏) 没て(天岐) のて(黒) 九かしこ——こ(伏) 一〇窮——庇  
 (内松) 三に——×(群黒) 三天明に——すてに明に(加) 三及す——及はす(天  
 岐黒内松) 四明日——あくる日(祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛) 五奉る——  
 ける(伏祐扶天岐) 侍ける(群) 侍る(神東黒内松御尊筑九加都寛) 六奔走——奔走を  
 (天岐黒内松御尊筑九加都寛) 奔走を(東) 七きさし——に——きさしに(黒内松) き  
 さすに(筑加都寛) 八よさは——よさはイ(東) よさ(御) 九郡郡——郡郡(東) か  
 んたんの(黒内松御尊筑九加都寛) 一〇遊仙の——×(黒) 三也——×(扶) 三それ  
 ———是(筑) 三ほとこの——×(天岐) 四は——×(内松) 五とそ——とて(祐群  
 扶神天岐東黒内御尊筑九加都寛)

## 〔五月十七日〕

十七日又かゝみしまへかくる月出ぬほと江口<sup>ニ</sup>にいて、鵜飼を見る六艘の  
 舟に簪をさしてのほる又一艘をまうけてそれにのりて見物すおほよそこ  
 の川ののほりくたりやみになれは猶舟数をしらぬといふを聞て

255 ゆふやみに八十とものおのかゝりさし さしのほるう舟は数もしられ

す

鵜の魚をとるすかた飼鵜の手縄をあつかふ駄なとけふはしめてみ侍れは



此二字イニナシ  
 たる。 (東) 三に——にて (天岐筑加) 三やきて——焼 (天岐加) 三賞翫す

——賞翫する (内松) 三なん——也 (天岐黒) なり (東) 三コノ歌小字 (東)  
 呂ぬ——ぬ (天岐) す (内松) 三とも——にも (筑九加都寛) 三とも——にも  
 (都)

〔五月十八日・十九日〕

十八九ことなることなし僧都しはく来る

〔校異〕 一十八九——十八九日 (祐群扶天岐) 十八日十九日 (神黒尊筑加) 十八日十九日  
 (東) 十八十九日 (内松御九都寛) 二僧都——僧正 (神)

〔五月二十日〕

廿日帰南せんとすけふすなはち鏡嶋をたちてもとの路をへてたる井に  
 たる民あるといふ律院にとまる駄飼などは僧都の被官人たかやのなにか  
 しにおほせつけてねん比なる事ともありくたくしければもらしつまこ  
 とや文和の比後光厳天子南軍にをそれましめて小嶋に行幸のありし  
 次に此寺にもわたらせ給けるとなん行宮のいしすへなど今にありその時  
 身つらかうへさせ給へる松の老木となりてあるをみて

258 世におほふ君か御かけにたくふらし 民やすかれとうへしわか松<sup>(を)</sup>

あふはかといふはたる井よりこなた也名寄に青墓里といへるこの事にや<sup>(を)</sup>

259 契あれば此里人にあふはかの<sup>(を)</sup> はかなからすは又も来てみん<sup>(を)</sup>

美江寺といふはかゝみしまより五十町はかりをへたてたるといへり本尊<sup>(を)</sup>

は十一面観音斗帳などの中にもましますさすうちあらはれて人におかまれ<sup>(を)</sup>

させ給利生をかうふることのおほしとなん往来のたよりに二度まうてゝ<sup>(を)</sup>

礼拝をいたすえんきなとくわしくたつめるにいとまあらず<sup>(を)</sup>

260 たのもしな仏は人にみえ寺の<sup>(を)</sup> とほりをたれぬ誓おもへは<sup>(を)</sup>

〔校異〕一帰南——帰寺(神松) 帰馬(天岐) 二鏡嶋——かゝしま(内松) 三民ある——

民安寺(祐群扶神天岐東黒内松御尊九加都寛 民南寺(筑) 四に——也こゝに(内松)

五とまる——とまり(都) 六駄——献(群神) 餉(天岐東御筑九加都寛) 七飼——初

(内)初(松) へなとは——なと(伏) 八被官人たかや——被<sup>本ノマ、不分明成</sup>山トかや(神)被官人

たかやす<sup>イニナシ</sup>(天岐)被官人た<sup>イニナシ</sup>りや(東)被官人なかや(御)被官人たるや(尊九)被

官たる人たか屋(筑加)被官たる人たるや(都寛) 二の——×(都) 二文和——文

治(黒) 三天子——天子<sup>此ノ一字異ニナシ</sup>(天岐) 三軍——金(内) 金(松) 四に——の(伏

加都寛) 一吾をそれ——おそハイレ(天岐) おそはれ<sup>イニナシ</sup>(東) おそはれ(黒) 一六に——

×(黒) 一七の——×(天岐加都)のイ(東) 一八次に——時(内松) 一九にも——に

(尊九加寛) 二〇なと——×(尊筑九加都寛) 三身つから——<sup>此ノ四字異ニナシ</sup>身つから(天岐) 三



給へる——給へる<sup>けい</sup>（東）給つる（黒） 三の——×（筑） 三に——を（加） 三寄——  
 寄<sup>寄イ</sup>（東） 三里——×（東） 三いへる——いふも（加） 三はかなからすは——はか  
 なかりすは（都） 三来てみん——きゝみん（松） 三美江寺……誓おもへは——〔256〕  
 ノ後ニアリ（天） 三かゝみしま——かゝしま（神天岐東内松御加） からしま（尊筑九  
 寛） 三を——×（加） 三いへり——いへる（尊九都寛） 三斗——戸（黒） 三か  
 うふる——うふる（黒） 三ことの——もの（群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛）  
 三二度——二三度（天岐） 三拜——物（寛） 三くわしく——くはしくは（天岐尊筑  
 九加寛） 三いとま——いと<sup>ま歌</sup>（神） 三あらず——なし（都） 三たのもしな——たの  
 もふな（天岐） 三とはりを——ことほり（内松） とほりも（加）

## 〔五月二日〕

△注V（一）は底本になし。以下同  
 様。祐による。

廿一日たる井をたちてのみちすからの名所おろくさきにしるしをはり  
 ぬいふきの明神の鳥井は（北にあり南宮の鳥井は）南にありをのくそ  
 のまへをすく

261 又<sup>三</sup>こんといふきの山の神ならは さしも契し事な忘れそ

262 名もたかき南の宮のちかひとて 山のひかしの道そたゝしき

みのゝ国の歌枕の名所その所はいつくともしらねとも心にうかふ事とも  
 を筆のつゐてにかきあつめ侍へし

263 まれにきてみのゝお山の松のうれの うれしさ身にもあまのは衣

△注△内による。

△注△264△265  
(伏祐群扶神天岐東  
黒)

△注△266△267  
(神)

△注△268△269  
(黒)

△注△元△三  
(国人説曰この山には天人影向あるによつて人來の松とも名つけ侍ると

かや)

264 いろそよおさまれる世をまつことは みのゝお山のひとつ心に

265 あま衣みのゝ中山こえ行は ふもとにみゆる笠ぬひの里

266 時鳥ね覚の里にやとらすは いかてかきかん夜はのゝ一こゑ

267 はゝきゝの梢ありともみえなくに たれをも山となつて初けん

268 あけくれはしけきうき身のわさのみに 猶分まよふ夏草の露

269 五月雨のもみちをそむるためしあらは 舟木の山のいかにこかれん

270 七夕の逢せはとをきかさゝきの おふさのはしをまつやわたらん

271 東路のうらまのし水名をかへて しらしな旅にたつの市人

272 鳩鳥のすのまた河に月すめは あらはれわたる波の下みち

273 わかえつゝ見るよし哉滝の水 老をやしのふ名になかれなは

274 席田を織物ならはしき波や いつぬき川のたてとならまし

275 いくちとせかきらぬ御代は席田の つるのよはひもしかしと思ふ

276 芦かきのまちかき跡を尋ても 小嶋の里にみゆきやはせぬ

277 よの人のあたをむすふの神也と いのらは心とけさらめやは

近江の国番馬といふ所より路をかへて南へ行番馬を物の名にとりなして

278 わくる野のまた末とをきくさはには 日かけの駒よしはしとまれ  
 すりはり峠を南へくたるとて右にかへりみれば筑夫嶋なとかすかに見へ  
 て遠望まなこをこらすふもとには神田といふ所の一つなき田なとみゆ又  
 左のかたにはそひえたる岩に松一本あるその下に石塔あり西行法師かつ  
 かといひつたへたるとなん

南行数里下陽坡 西望平湖遠不波

孤嶋屹然何所似 琉璃万頃一青襟

279 旅衣ほころひぬれやすり針の 峠にきてもぬふ人のなき

西行か歌に

ねかはくは花のもとにて春しなん その二月のもち月の比

とよめる事を思ひ出て

280 いかにして松のかけにはやとるらん 花のもとゝかいひしことのは

かねてはかのむらにとまるへしとさためしかともとかくして日もくれか

たに成ぬれは小野といふ所まで行てそのよはさる小庵に一宿しぬ今春大

夫来逢て一声を出して羈愁をなくさめ侍り

281 枕ゆふをのゝをさゝのみしかよも 旅にしあればあかしかねつゝ

[校異] 一の—×(天岐内松)のイ(東) 二の—×(天岐加都寛) 三名所—名所く  
 (黒) ×(加) 四おろく—おほく (伏) おのく (天岐尊筑九都寛) ×(加)  
 五の—×(天岐) 六の—のイ(東) 七北にあり南宮の鳥井は—×(底伏) へは  
 —×(加) 八南—南伊吹(筑) 九をのくそのまへをすく—×(加) 二まへ  
 —ところ(内松) 三すく—過て(天岐) 四又こんと—またもこん(内松)  
 五ならは—ならは<sup>イニテ</sup>(都) 六コノ歌ナシ(天岐黒) 七とて—こそ(内松) 八国  
 の—×(黒) 九の—と云(内松) 一〇その所—×(内松都) 一一は—×(黒)  
 一二とも—と(加都寛) 一三事—所(黒) 一四侍へし—侍りし(天岐) 一五きて—  
 けて(神) 一六うれ—これ(内) かれ(筑) 一七の—×(神内松) の<sup>イニナシ</sup> (東) にの  
 (黒) 一八うれしさ—うれしき(東黒尊筑九加都寛) 一九国人・・・とかや—×(底  
 伏祐扶神黒) 二〇国—或<sup>國イ</sup>(東) 二一説—説に(天岐筑九加) 二二日—×(加)  
 二三には—に(天岐筑九加) は(加) 二四とも—と(東) 二五とかや—なり(東)  
 とや(筑) 二六コノ歌ナシ(内松御尊筑九加都寛) 二七いのる—心ある(神) 二八いのる<sup>心あるイ</sup>  
 (東) 二九おさまれる—おさまる(群) 三〇あま衣—あさ衣(扶内松御) 三一ふもと  
 —ふりと(都) 三二里—松(加) 三三やとらすは—とまらすは(都) 三四に—  
 は(黒) 三五をも—かも(天岐都) も(尊九) も(筑九) 三六のみ—みの(祐群  
 扶神天岐東内松御) 三七もみちをそむる—紅葉そふる(黒) 三八ためし—ならひ  
 (黒) 三九の—に(尊) 四〇の—に(加都寛) 四一いかに—いか(筑加都寛)  
 四二おふさ—をふわ(黒) 四三わたらん—わたさん(伏) 四四うらま—うるさ(祐  
 扶) うるま(群神天岐東黒内松御尊筑九寛) 四五かへて—かへは(祐群扶神天岐東黒  
 内松御尊筑九加都寛) 四六に—も(東) 四七わたる—いつる(神東黒内松御尊筑九  
 加都寛) 四八わかれ—我身(神) わかみ<sup>えイ</sup>(東) 四九よし—年<sup>よしイ</sup>(東) 五〇滝の水—  
 滝水の<sup>のイイニナシ</sup> (天岐) 五十一やしのみ—やしなふ(祐扶神内松御尊筑九加都寛) 五十二織物—

しき物(内松)かる物(都) 空しき波——しき嶋(黒) 空と——も(黒都寛) 空  
 よはひ——まよひ(都寛) 空も——に(筑九都寛) 空しかし——しめし(伏)  
 突声かき——あら垣(神) 空も——も(天岐) 空に——は(九加都寛) 空やはせ  
 ぬ——やはせる(神)をやせん(黒)やはせぬ(東)おあた——あた(加) 空心——  
 ここの(松) 空国——国に(群) 空より——に(加) 空路をかへて——道を替  
 (加) 空行——行は(都) 空とりなして——とりなしぬ(内松)なして(筑)とりて  
 (都) 空の——に(尊筑都寛) 空の——×(右傍ニ「落字歟本ノマ」ト朱書アリ)  
 (黒) 空よ——も(東)も(加) 空くたる——くたり(尊九) 空に——を(黒)  
 空かへりみれば——かへり見れば(東)かへりみれ(尊九) 空遠望——遠くのそめは  
 (内松)をちより(尊筑九)遠きより(加都寛) 空には——に(黒) 空一つなき——  
 一つなき(枯扶黒)一つなき(神黒御筑九加都寛) つき(内) つき(松) 空なと——  
 ×(筑) 空岩——岩(天岐) 空一本——松の一本(東黒内松) 松の一本(御筑九  
 寛) 松の一成(都) 空その——厥(東松) 空に——には(イニナシ) (東) 空か——×  
 (黒) 空孤——瓢(筑) 空慄——螺(伏群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛) 空や  
 ——と(天岐加) 空峠——たむけ(東黒内松尊筑都) 空きても——きるも(尊筑九  
 加都寛) 空ぬふ——あふ(御) 空の——も(天岐)そ(都寛) 空なき——ため  
 (黒) 100コノ歌小字双行(神) 101春——暮(扶) 101事——哥(黒) 101出て  
 ——出して(天岐) 101やとるらん——やとるらん(東)やとからん(尊九都寛)宿か  
 らて(加) 101か——は(加) 101かのむらに——かのむらに(東) 枝村といふに  
 (黒) 枝むらに(御尊筑九都寛) 101とも——と(加都寛) 101さる——さる(天岐)  
 101しぬ——して(黒) 101羈愁——羈然(伏) 羈然(天) 羈旅(都) 101侍り——  
 侍りけり(イニナシ) (東) 101枕——杜(伏) 101をの——もの(神) 101も——を(天

岐 二五〇——つも(黒)

〔五月二日〕

廿二日小野をたちてたかといふ所をすくやしる有

282 ふりはてゝ神さひにけりたかの宮 たかよにかくはいはひそめけん

四十九院を物の名にあらはす

283 かり人は山にしゝふくるむ事も しらぬためには我そ音をなく

284 みたれ行世にあふみちのをのかしゝ うくるむへきは此身也けり

たかみやかはらは水のあとはかり也

285 過行はたかみやかはら水もなし ことしはおそき五月雨の比

越智川をすくとて

286 ゑち川のさてさす瀬々に行水の あはれもしらぬ袖も(ぬれけり)

観音寺といふ山寺をみやりてこの名は諸国にあるにやいさゝか聖廟の御

詩を思ひ出て

287 あふみちも心つくしの旅なれや たゝ鐘を聞古寺のまへ

おひそのもりにて

288 我袖よ駒もすさめぬたくひにて おひその杜のしつくおそかる

△注△伏による。

289 我こそはおいそのもりの時鳥 (お) をのかさかりの声なおしみそ

その日は武佐といふ所にやとる (お)

290 ものゝふのゆかけはたてそなひくなる (元) むへこそむさの名は残けれ (三)

【校異】一たちて——立出て(黒) 三たか——なか(扶) 三を——に(松) 四ふり——

あり(東) 五はて——出て(内松) 六神さひ——神さひ(神) 七しゝふく——し

らふく(東) 八も——に(九) 九そ——も(加) 一〇コノ歌ナシ(内松御尊筑九加都

寛) 二をのかし——おかのしく(黒) 三也——あり(東黒内松御尊筑九加都寛)

三は——と(加) 四なし——なく(黒) 五おそき——ほそき(内松) 六すく——

過る(加) 七も——と(黒) 八×——ぬれけり(伏祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九

加都寛) 九いさゝか——×(尊筑九加都寛) 一〇や——は(都) 三にて——過て

(都) 三よ——に(伏黒内松九加) 四よ(天岐) 五すさめぬ——すさまぬ(九加都寛)

六しつく——しはし(筑加都) しはく(九) 七おそかる——おそしる(群) おそ見

る(黒) おりつる(加) 八こそは——からそ(黒) よりも(都) 九やとる——やと

り侍る(内松) 六ものゝふ——ものゝふ(寛) 七なる——也(黒) 八こそ——と

そ(都) 三けれ——けり(都寛)

〔五月二三日〕

廿三日猶むさにとうりうちをくりの事法印かたより伊庭に申つけ侍

るか三里はかりをへたてたる所へつかひにいて、留守なりければ伊庭方  
へつかいの行かへるあいた時刻うつるによりて也其日は雨ふり風はけし  
くはにふの小屋のかりふしならはぬ旅のものうきいはすともしるへし

南来北望漢宮天 一夜江辺聴雨眠

白髪更添新白髪 青氈不是旧青氈

【校異】一法印——法印（伏祐群扶神）僧都（内松御都）僧都の（尊筑九加都寛）ニか——  
 ×（尊筑九加都寛）ニを——×（天岐尊九加都寛）を（東）——へた  
 てゝたる（都）ニなりければ——也されは（加）ニへ——より（内松）ニつかいの  
 使者（内松）ニ行かへる——帰る（内松）ニあいた——あいたに（尊筑九加都寛）  
 ニ也——や（神）×（筑九加都寛）ニはけしく——はけしくて（群扶神天岐東尊）は  
 けて（黒）はけしくして（内松御筑九加都寛）ニの——に（内松）ニものうき  
 ——ものうき（祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛）ニいはす——いはひ（天  
 岐）いは（筑）ニしるへし——立るへし（神）ニ六コノ詩ニ五日条ニアリ（加）ニ  
 天——天（東）ニ——×（筑）ニ九眠——明（東）ニ

〔五月二十四日〕

廿四日伊庭かたより丘士きたりその日も雨風やます水口をすくとて



291 雨ふれは小田の水口<sup>ミヅグチ</sup>をきもあへす すたくかはつ<sup>ミ</sup>のこゑそあらそふ  
 からうして五十町はかり行て新宮の馬場<sup>ウマバ</sup>にいたる禪侶の庵<sup>ワン</sup>をかりて宿<sup>ヤド</sup>そ  
 新宮は山王<sup>ヤマウ</sup>にてましますとかや所<sup>トコロ</sup>のこほり司<sup>ツカサ</sup>なときたりて警固<sup>セイコ</sup>をいたす  
 夜<sup>ヨ</sup>もすから雨風はなはたし

〔校異〕一きたり——きたる（伏祐群扶筑九加都寛）きたり（東）来（内松）ニその——  
 此（内松筑）ニをきもあへす——せきもあへす（群天岐内松御尊筑九加寛）おさもあ  
 へす（神）をきもあへす（東）せももあへす（都）四こゑそあらそふ——声のみそそ  
 ふ（加）五からうして——かくして（内松）からくして（加）六いたる——いたり（内  
 松）七宿そ——宿かり（伏）宿す（祐群扶神天岐東黒内松御尊筑九）宿る（加都寛）  
 へは——の（尊九加都寛）×（筑）九山王——山王（九）一〇所のこほり——×（内松）  
 二警固をいたす——警固を出す（黒）警固す（加）三夜もすから——洪水（内松）×  
 （尊筑九加都寛）

〔五月二五日〕

廿五日馬場をたつとて庵室<sup>ワンシツ</sup>にかきをく

憶得<sup>オキドク</sup>三生石上緑 一庵風雨夜無眠

今朝更下山前路 老樹雲深笑杜鵑

292 契<sup>セキ</sup>あらは又あふみちのかり枕<sup>マク</sup> むすひやすてん<sup>ミ</sup>一夜はかりに

かねては水口より伊賀のほとりにつくへき支度なれと洪水に路とをる事  
 やすからすおなし国のうち玉滝寺といふ律院にとまる本尊は薬師如来に  
 てましますといへり

なかめはや玉滝寺のそらはれて 瑠璃の光にうつる朝日を

〔校異〕一庵室にかきをく——イニ庵室にかき置く〔都〕ニコノ詩二三日条ニアリ〔加〕

三山前——三尊〔神〕 哭笑——哭〔祐群扶神天岐黒内松御尊筑九加都寛〕 三コノ歌ナ

シ〔黒〕 六あらは——をは〔内松〕 七すてん——はてむ〔加〕 八水口より——イニ水口

より〔都〕 九伊賀の——伊賀の国〔黒〕 一〇ほとり——はとり〔祐群扶神天岐黒内松

御尊筑九加都寛〕 二と——と〔東〕 三路——路を〔黒〕 三玉滝寺といふ——玉滝

なといふ〔加〕 四は——×〔尊筑九〕 五いへり——云〔加〕 六うつる——移る〔内

松〕

# 〔五月二十六日〕

廿六日けふは日のけしきなをれる玉滝をたちてかはるといふ所をとをる  
 ひとつはしあり高松宮は右のかたにありてみやる牛頭天王にてまします  
 とかや

わたりえぬうき世の波にお〔は〕れて かは井の橋をふむそあやう  
 き

△注▽底本虫食ひ。諸本により補ふ。

295 ゆふかけて猶こそきかめ郭公 たむけのこゑの高松のみや  
 北川といふ川はた水落す法印伊賀の住人におほせつけたるによりて藤長  
 なといふ者ともきたりてこしをかたにかけてわたす  
 296 いかくせん此五月雨に北川の あさ瀬ふみわたる人なかりせは  
 又服部川をわたりて菩提寺にいたる是も招提門徒の律院也まうけの事は  
 法印申つけて伊賀のともからさたせしむとなむ

〔校異〕一日のけしき——日の景色(天岐) 日の光(加都寛) 二なをれる——なをれり(祐  
 群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛) 三玉滝——玉滝寺を(岐) 四とをる——とをると  
 て(天岐) 五ひとつ——一の(内松) 六のかた——×(天岐) 七にてましますとか  
 や——にてましますとかやイナシ(天岐) 也(内松) にてましますとかや(都) 八おれ  
 て——おほゝれて(祐群扶神東黒御尊九加都寛) おほゝれて(天岐) おほれて(内) お  
 ほそれて(松) おほはれて(筑) 九こそ——うそ(都) 一〇きかめ——きくめ(都)  
 二こゑの——こゑハイニ(黒) 三高松——高はし(加都寛) 三川——×(加都寛) 四  
 はた——いまた(神天岐東黒内松御尊筑九) 間また(加都寛) 五落す——おちす(九  
 加都寛) 六法印——僧都(内松御尊筑九加都寛) 七藤長——藤出(神) 藤七(内松)  
 八なと——と(天岐尊加都寛) 九きたりて——来り(加) 一〇かけて——つけて(天  
 岐) かを(加) 三いかゝ——いかに(祐) いかにか(天岐内松加都寛) 三あさ瀬——  
 浅瀬(天) 三わたる——わたる(天) 四招提門徒——招提門院(黒) 五の律  
 院——×(都) 六法印——僧都(内松御) 七さたせしむ——さたむ(黒)

〔五月二七日〕

廿七日なを菩提寺に逗留す伊賀のものともさりかたく抑留する故也

菩提樹下古精藍 殿閣微涼来自南

暫供藤床兼瓦枕 駒く一睡味方甘

活計のうちにも故郷の心は又わすれかたきにや有けん

297 旅衣昨日も今日も昏はとり あやに恋しきならの古郷

〔校異〕逗留す——逗留(加) ニさりかたく——きかかたく(本ノマ、フシン) (加) ニ×——口誦の詩

曰(内松御) 古——舌(尊) 藍——鑑(扶) 供——借(祐群扶神天岐東黒内松)

御尊筑九加都寛 七方——于(伏) へ計——討(東) 討(黒) の心——×(加)

〇は又——いまた(黒) は(内松加都) ニわすれかたき——わすれかたく(黒) 三

けん——なん(天岐)

〔五月二八日〕

廿八日菩提寺をたちて上野小田寺など云所をとをるたやまこえは川の水

いまたわたりかたかるへしとてかさきとをりにおもむく嶋の原河といふ

河をわたりて

298 しまの原川せの波のかちわたり たやまこえをはよそになしつ

大河原といふ所は伊賀と山城とのさかひなり河原の木石さなから前裁な  
とをみるこくくなれは

299 苔むせる岩ねに松は大河原 かはらざりけり庭のすさきに

笠置川をは舟にてわたるならよりむかへのものきたるによりていかのを  
くりをはこれよりかへしぬ帰路いそくによりて山をはみやりたるはかり  
也ことさらこそまうてめと思ひ侍りきのふけふは雨ふらす

300 えもしらぬみの山過て降り雨のかさきにきくは又はれにけり

301 雲の上にその曉を待ほとや 笠置のみねに有明の月

秉燭の時分南都の宿坊につくこのち雨はなはたたるよくせずは笠置  
にとまるへかりけり

【校異】 小田寺——小田寺イニナシ 小田イニナシ (祐群扶) 小田 (神東黒内松御尊筑九加都寛) 二川——路

(内松) 河イニ原 (都) 三の——のイニナシ (天) × (黒加) 四とをり——× (加) 五おもむく——  
おりむく (松) おもむき (加都寛) 六なし——なり (黒) 七つる——つ (伏群神天  
岐東黒内松御尊筑九加都寛) つるイナ (扶) 八大河原——大イ河原 (都) 九所——川 (黒)

10この——の (筑加都) 二木石——松 (加) 木口 (都寛) 三苔——苔苦 (都) 四む  
せる——むせは (内松) 五むかへ——むかひ (尊筑九) 六きたる——来 (内松)  
七をくりをは——をくりをは (天) 送は (内松) 奈良送りをは (筑) おくりを (都寛)

「七これ——かしこ（都寛） 八帰路——帰洛を（群扶）路（神） 帰路を（天岐黒内松御筑九加都寛） 二よりて——より（加） 二をは——を（黒） 三みやりたる——見やたたる（都） 三ことさら——ことさらに（群神天岐東黒内松御尊筑九加都寛） 三侍り——侍るか（黒） 侍るなり（筑都寛） 侍候（加） 三は——×（加） 三も——そ（群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛） 三降し——降（黒） 三の——のイ（東×御） 二に——×（神） 三や——に（加都寛） 三時分——時分に（天岐内松） 時（加） 三に——へ（黒） 三よくせずは……けり——×（神東黒） 三よく——よう（内尊筑九） 三けり——ける此終ノ一行異本（天岐） ける（内松） キイニけり（都）

## 44 南都百首ハ文明五年六月以降▽

底本内閣文庫蔵「詠百首和歌」本ハ201・453▽

校合本河野信一記念文化館蔵「詠百首和歌」本ハ123・922▽

島原公民館松平文庫蔵「歌書集奥」ハ119・6▽所収「後成恩寺百

首和歌」本（松）

内閣文庫蔵「墨海山筆」ハ217・31▽第九四冊所収「一条禅閣百

首和歌」本（墨）

天理図書館吉田文庫蔵「詠百首和歌」本ハ81・吉119▽

金刀羅宮図書館蔵「詠百首和歌」本ハ23・5・1277▽

内閣文庫蔵「後成恩寺殿南都百首」本ハ201・461▽

群書類従本（群）

宮城県立図書館伊達文庫蔵本ハ911・24・17▽

大阪市立大学附属図書館森文庫蔵本ハ911・FUJ・森文庫▽

（大）

（伊）

（群）

（内）

（金）

（天）

（墨）

（松）

（河）